

重症心身障害児と関わり合うインクルーシブ保育を創造する力の考察

○小柳津和博
(桜花学園大学保育学部)
KEY WORDS: インクルーシブ保育、

野々山貴
(こども発達支援センターひかりっこ)
重症心身障害、創造力

1 問題及び目的

障害者権利条約批准を受け、子どもたちが共に育つインクルーシブ保育の充実に向けた実践が進められている。子どもたちが共に育ち、子ども同士で関わり合うことの重要性は広く理解されているものの、それらを原理化することについて長く課題とされてきた。わが国でもインクルーシブ教育・保育に必要な支援技術の標準化研究が進みつつある。しかしながら、公約数的な研究になっていることが課題とされており、今後は障害種別に分けるなど、小さな枠組みで必要な支援の在り方を検討していくことが求められている。

近年、重症心身障害児が地域の園に通う事例が増えてきている。今後のインクルーシブ保育の充実のため、重症心身障害児と他児が関わり合う保育に求められる支援技術を明らかにしていく必要がある。筆者らは子ども同士の関わり合いを促す保育技術の一つとして、保育者の創造力について検討してきた(小柳津・野々山,2021)。しかしながら、その創造力の具体的な姿は明らかになっていない。そこで、本研究では、重症心身障害児との関わり合いを促す上で必要となる保育者の創造力に関する具体的な情報を収集することを目的とした。

2 方法

(1) 対象

2020 年 7 月～11 月 A、B、C の 3 施設の保育職員に対して、アンケート調査を実施した。

A 施設：重症心身障害児を含むインクルーシブ保育実践園（園児 48 名、重症心身障害児 6 名在籍）

B 施設：公立児童発達支援事業所（定員 30 名、在籍児は全員知的障害児・発達障害児）

C 施設：私立保育所（定員 135 名、発達障害児一部在籍）

(2) アンケート内容・調査方法

対象児（4 歳女児、重症心身障害）の療育場面を撮影した映像（約 4 分間）を視聴し、対象児を含むインクルーシブ保育をイメージする。対象児と他児（障害のない子ども）が関わり合うために必要となる保育者の支援について、6 項目（1.活動内容、2.参加方法、3.言葉がけ、4.人的環境、5.物的環境、6.その他）から創造したことを自由記述する。アンケートの記入時間は映像視聴後 10 分間とし、制限時間内にできるだけ多く記述することとした。

(3) 倫理的配慮

対象者に本研究の趣旨及び倫理的配慮について口頭・文書で説明し、趣旨に賛同する方の協力を得た。また、所属機関にて研究倫理審査を受審し、承認を得た。

(4) 分析方法

テキスト化したアンケート結果について、テキストマイニング用ソフトウェア KH-Coder を用いて頻出語（コード）を導き出し、分析を行った。

3 結果

A 施設 13 名、B 施設 6 名、C 施設 25 名の合計 44 名から研究協力を得た（研究趣旨同意者からの回収率 100%）。

1.活動内容、2.参加方法の項目について、各施設の頻出語上位 3 位までを表 1 に示す。表内の数字は出現数。

表 1 各施設における頻出コード上位 3 位

項目	A 施設		B 施設		C 施設	
1.活動内容	遊び	[6]	遊ぶ	[8]	遊び	[15]
	活動	[3]	する	[5]	遊ぶ	[11]
	する	[3]	ボール	[5]	する	[8]
	使う	[3]				
	他	[3]				
2.参加方法	積み木	[3]				
	する	[10]	他	[4]	する	[18]
	他	[9]	ゴール	[3]	保育	[10]
	対象	[7]	する	[2]	一緒	[7]

4 考察

(1) 活動内容におけるコードからの考察

「1.活動内容」では、施設によって「遊ぶ」と「遊び」の 2 種類のコードが多く見られた。B・C 施設で見られる「遊ぶ」について前後の文脈を考察したところ、保育者が一緒になって遊ぶという意味が込められていた。「遊ぶ」と表現する保育者は、遊びに入り込み、遊びの仲介役として子どもたちの真ん中に位置して活動内容を創造する力が働いていると考えられる。一方、A・C 施設に見られる「遊び」の文脈には、提供する遊びの内容に関する記述が中心だった。提供する遊びの内容は、重症心身障害児に直接提供するのではなく、他児を誘い込むような意図が含まれていた。「遊び」と表現する保育者は、常に子どもの真ん中に立つのではなく、必要な時のみ仲介できる位置に立とうとしていると推察できる。障害のない他児を誘い込むことで、重症心身障害児との関わり合いが成立するように保育者が自身の立ち位置を変化させていると考えられる。

(2) 参加方法におけるコードからの考察

「2.参加方法」のコードの違いに、A 施設の「他」「対象」と、C 施設の「一緒」があった。コード前後の文脈を考察したところ、A 施設の「他」「対象」には「児」が続いており、他児と対象児の視点での記述が主だった。一方、C 施設の「一緒」は「保育者」が前に置かれ、保育者の視点で記述されていた。この違いは子ども同士で活動に参加できると捉えるか、保育者が直接的に関与しないと参加が難しいと捉えるかによるものであると考えた。重症心身障害児を含む集団の保育をする A 施設は、子ども同士を主語にして関わり合いを考える傾向にある。一方、重症心身障害児の保育経験が少ない C 施設は、保育者自身が役割を担うことで子どもの参加を創造しようとする傾向にあると考えた。

以上のことから、重症心身障害児と関わり合う保育を創造する力には、保育者の立ち位置に関する創造力、子ども同士を主語においた参加方法に関する創造力があることが示唆された。

【文献】 小柳津和博・野々山貴（2021）インクルーシブ保育における保育者の創造力に関する研究—重症心身障害児を含む集団の関わり合いを促すための専門性—,日本保育学会第 73 回大会発表論文集,P421-422

本研究は日本学術振興会科学研究費補助金（20K0260）の助成を受けて実施したものの一部である。
(OYAIZU Kazuhiro, NONOYAMA Takashi)